

ソーシャルワーカーの思考に焦点を当てる意味

ー反省的実践家の視点からー

日 和 恭 世

【要 旨】

ソーシャルワーカーは様々なクライアントに出会い、援助を展開するなかでたくさんの実践の知恵を獲得しているが、それらの多くは十分に言語化されることなく、実践のなかに埋もれているのが現状である。しかしながら、専門職であるソーシャルワーカーは、自らの実践を社会に説明していく責任を有している。その責任を果たすためには、一人ひとりのソーシャルワーカーが自身の実践において何を見、何を感じ、何を考えたのかなどの実践の根拠を語ることが求められる。そこで、本研究では、Shōn の専門家像の視点から、ソーシャルワーカーの「思考」に焦点を当てて教育・研究を行うことの意味について考察した。

【キーワード】

ソーシャルワーカーの思考、反省的実践家、行為の中の知、クリティカル・シンキング

はじめに

パスカルの「人間は考える葦である」との言葉にあるように、人間は日常生活においていろいろなことを考えている。たとえば、昼食に何を食べるか、仕事が終わったら何をするか、といった個人的で容易に答えを出すことができるものから、生きる意味とは何か、人間は死後どうなるのか、といった答えを出すことが極めて難しいものまで様々である。

われわれの「考える」という作業は、意識的にも無意識的にも行われていると言われるが（山鳥 2002）、普段から自分自身の思考について考えている人はどの程度いるであろうか。おそらく、なぜ自分がそのように考えたのかを問うことなく過ごしている人が多いのではないだろうか。

しかしながら、専門職と呼ばれる人々は、専門職としての言動を世の中に説明していく責任を有している。これは、アカウンタビリティと呼ばれるものであり、アカウンタビリティとは「クライアントのもつ問題を解決するために、またはクライアントのニーズを満たすために、専門職者である実践者が有効な方法を用いて援助することについて根拠を示して説明すること」と定義される（藤井 2004：29）。根拠に基づいた実践を展開するため、ソーシャルワークにおいても近

年、「クリティカル・シンキング」の重要性が指摘されており（秋山 2012）、ソーシャルワーカーの思考に関心が向けられるようになってきている。

そこで、本研究では、専門職と思考との関係を考察することによって、ソーシャルワークの教育・研究において「ソーシャルワーカーの思考」に焦点をあてる意味について考察する。

1. 人間が思考するとは

そもそも「思考」とは何であろうか。広辞苑によると、思考とは思いをめぐらせることであり、広義には人間の知的作用のこと、狭義には、概念・判断・推理の作用のことであるとされる。山鳥によれば、「思考は心像という心理的な単位を縦に並べたり、横に並べたりして、それらの間に関係を作り上げる働き」であるという（山鳥 2002：12）。また、市川は、思考とは「ある状況に対して反射的に反応するのではなく、複雑な内的過程を経て判断や行動が行われること」であり、「思考には、推論、問題解決、理解、概念形成などの機能が含まれる」と説明している（市川 1996：1）。さらに、波頭は、思考とは「思考者が思考対象に関して何らかの意味合いを得るために頭の中で情報と知識を加工すること」であると述べている（波頭 2004：16）。

これらの定義を見ると、思考とは簡単には言い表すことのできない複雑なもののように感じられる。思考とは何かを説明するとなるときわめて難しいが、私たち人間は誰しも様々な思考をしながら生活している。その意味では、思考はとても身近なものでもあるといえる。ここでは、上記の定義を参考に、思考とは「ある状況について、推論や判断などを行うことによって何らかの意味合いを得ること」と捉えることにしたい。

思考の研究は古くから哲学や論理学、心理学において行われてきたが、最近では、心理学や神経科学、言語学、情報科学などを総合的に取り入れた「認知科学」という分野において主に行われている。これらの研究分野では、心理学が元来関心を寄せてきた「人間はどのように思考を行っているか」ということだけでなく、人間と同じようにコンピュータに思考させる人工知能の研究なども含まれる。しかしながら、「思考の働きは、推論のための情報処理機能だけで実現できるものではない。記憶や学習をはじめとする、他の認知プロセスとの協同作業が不可欠であり、しかも、それらはたす役割がきわめて大きい」とされる（高野 1994：3）。このように、人間の思考は古くから研究されてきたが、その複雑さゆえに、思考の全体性を理解することは非常に難しいことであるとされる。そのため、ここでは思考のなかでも推論と意思決定について考えてみたい。

思考の研究において柱のひとつとされてきたのが推論である。市川が「私たちの思考は推論の連続であるといっても過言ではない」（市川 1997：ii）と述べているように、推論は思考の重要な要素である。推論とは「いくつかの前提からなんらかの結論を導くもので、その導出が絶対確実なもの」（野矢 2006：16-17）であり、推論には「演繹的推論」と「帰納的推論」があるとされる。演繹的推論とは、「前提が真であれば結論も必ず真となるようなタイプの推論」（市川 1997：42）のことを言う。一方、帰納的推論とは、「個々の事例にもとづいて、一般的知識を導く推論である。その基本的プロセスは、事例を獲得し、仮説を形成し、検証することである」（楠見 1996：37）と言われる。

このような推論に関する研究は、心理学をはじめ論理学や統計学など様々な分野において行われている。昔の演繹的推論の研究では、正しい推論の方法に従えば、必ず正しい答えを導くことができると考えられていた。しかし、近年、人間の推論は正しい推論の方法以外の知識にも影響されることが分かり、認知心理学の研究では、私たちの日常的な推論には領域固有性があること

が明らかにされている。市川はこのことについて、医者と車の修理工を例に出し、医者が行う病気の診断と車の修理工が行う車の故障の原因の特定は、形式的には同じ推論であるが、医者が車の故障を調べると上手くいかないことを説明している（市川 1997）。つまり、私たちが日常的に行う推論は、形式論理とよばれる正しい推論の方法だけではなく、様々な領域の知識を用いて行われているということができる。このことから、私たちが正しい推論を行うためには、形式論理だけを学んでも不十分であり、推論を行うための領域ごとの知識を得る必要があることがわかる。

次に、推論と並んで思考のキーワードとされる意思決定について考えてみたい。意思決定とは「ある複数の選択肢（alternative）の中から、1つあるいはいくつかの選択肢を選択すること」であり（竹村 1996：81）、認知心理学の分野では、思考の研究の一領域として古くから行われている。

小橋によれば、意思決定に関する研究には、「意思決定のための研究」と「意思決定についての研究」のふたつがあるという。前者は「よりよい意思決定を行うための知識の拡充に寄与することを目的とした行為」であり、どのような意思決定が望ましいかという規範的なものである。これは、意思決定の支援するための研究であると言い換えることもできる。一方、後者は「個人や企業、家族などの人間の組織はどんな環境条件や課題のもとで、どんな決定を下すか、その決定に至る過程やメカニズムはどんなものか」を記述するものであり（小橋 1988：23）、これは意思決定の実態を明らかにするための研究であると言える。

では、どのような問題を意思決定の問題と捉えるのであろうか。小橋は、「意思決定行為は、てもとの問題を意思決定の問題と認識するところに生ずる。ある者にとっての意思決定問題が別な者にとっては意思決定とは別の問題と受け取られることもある」と指摘する（小橋 1988：27）。つまり、他の見方でも見ることができる事象を「意思決定」という新たな枠組みで捉えると何が言えるのか、ということをも明らかにするのが意思決定に関する研究だと言える。

2. 専門職と思考

一般に、複数の人間が同じ出来事を見聞きした場合、その解釈は人によって異なっている。殊に専門職と言われる人びとに関しては、同じ事象を見ても職種によってその事象の解釈やその後の行動に違いが生じる。

例えば、交通事故で病院に救急搬送された人がいるとする。医師はその人の命を助けることを第一義的な目的とし、必要であれば緊急手術を行うであろう。看護師であれば、医師の指示のもとに、手術のサポートをするとともに、その人の命を助けるための看護に徹するであろう。では、ソーシャルワーカーはどうであろうか。ソーシャルワーカーならば、その人の年齢や家族関係などの基本的な情報収集のもとに、今後考えられる生活課題を予測し、それらの解決に向けた支援を行うであろう。このように、それぞれの専門職は目の前の事象を知覚した後、自らが有する知識や経験のもとに様々な選択や判断を行いながら事象を認識し、働きかけを行っている。これは、先に述べた推論の領域固有性からも容易に理解できる。

以上のことから、知覚する事象は同じであっても、思考を通して得られる結果は職種、さらには個人によって異なるということが言える。であるならば、ある事象を知覚した際、何を見、何を考え、どのような判断をしているのか、という思考にこそ、それぞれの専門職の専門性が存在すると考えることができるのではないだろうか。

そもそも専門職（profession）とは、「学識（科学または高度の知識）に裏づけられ、それ自身

一定の基礎理論をもった特殊な技能を、特殊な教育または訓練によって習得し、それに基づいて、不特定多数の市民の中から任意に呈示された個々の依頼者の具体的な要求に応じて、具体的奉仕活動をおこない、よって社会全体の利益のために尽す職業」のことである (石村 1969 : 36)。また、嶋田によれば profession という言葉は「profess し、declare せざるを得ない、止むに止まれぬものを内面にもつ」とされる (嶋田 1980 : 323)。

以上のような専門職についての認識をもとに、次に、Shön の専門家論を見ていくことにしたい。これまで、専門家の活動は「科学的な理論や技術を厳密に適用する道具的な問題解決にある」と捉えられてきた (Shön=2001 : 19)。このような実証主義的な認識に基づいた専門家を Shön は「技術的熟達者」と呼んでいる。「技術的熟達者」とは、「現実の問題に対処するために、専門的知識や科学的技術を合理的に適用する実践者」のことである (秋田 2001 : 214)。このような文脈では、医学や法律などの専門職が「メジャーな専門職」とされ、福祉や教育、神学などは「マイナーな専門職」と捉えられてきた (Shön=2001)。

しかし、Shön によれば、このような認識のもとでは、「手段の選択、達成する目的、意思決定という問題を設定する過程が無視されている」という (Shön=2001 : 56-57)。そもそも問題を解決するためには、その問題が何であるかを見極める必要がある。しかしながら、問題解決の過程であるとされる技術的熟達者の実践は、問題を解決することに焦点化されており、その問題を設定する過程には目が向けられていないというのである。

専門家は問題を解決する際、その問題にふさわしい解決方法を選択、決定するが、その前に必ず「目の前の状況における問題とは何か」ということを判断する行為が存在する。Shön のことばを借りれば、「問題状況を問題に移しかえるために、実践者はある一定の仕事をしなければならない。そのままでは意味がわからない不確かな状況の意味を認識しなければならない。」のである (Shön=2001 : 57)。そこで Shön が提唱するのが「反省的实践家」という専門家像である。「反省的实践家」とは、「専門家の専門性とは、活動過程における知と省察それ自体にあるとする考え方」であり (秋田 2001 : 215)、「行為の中の知 (knowing in action)」、「行為の中の省察 (reflection in action)」、「状況との対話 (conversation with situation)」という3つの概念で説明される。

「行為の中の知」とは、Polanyi の「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」(Polanyi=1980 : 15) という「暗黙知」の概念を基盤としたものであり、実践家の認識や判断、行為には身体的感覚をも含んだ暗黙の知なるものが存在するとされる。このような「行為の中の知」があるとすれば、それは、行動しながら自分の行動について考える「行為の中の省察」によって明らかにすることができる。このような思考は実践の核となるものである。われわれは、直感的で無意識的な行為の場合はそのことについて考えることはないが、それらの行為に驚きや不確かさを感じるとき、「行為の中の省察」によってそれらの新しい状況に応えようとする。これまで出会ったことのないその状況に対応するために、実践者は新たな枠組み (フレーム) を作ろうとする。それが「状況との対話」である (Shön=2001)。

つまり、実践者は「行為の中の省察」を行うとき、自らの「実践の文脈における研究者」となり、「独自の事例についての新たな理論を構成している」のである (Shön=2001 : 119)。このような専門家の行為は、まさに行為化のための推論であり、その推論の確証を得るための探求であるとも言える。

このように、反省的实践家の視点に立つならば、「行為の中の知」にそれぞれの専門職固有の知識や経験を重ねることで積み重ねられた知恵が存在していると考えられる。したがって、専門職がそれぞれの専門性を明らかにするためには、「行為の中の省察」を通して「行為の中の知」

を言語化する必要がある。ここに専門職の思考に焦点をあてることの大きな意味がある。

3. 専門職の思考に関する先行研究

では、専門職の思考はこれまでどのように研究されてきたのであろうか。Shön によれば、実践者の「行為の中の省察」の能力向上のための研究には、①フレーム分析、②レパトリーを築く研究、③探究と理論の橋わたしをする基本的方法に関する研究、④「行為の中の省察」の過程についての研究の4種類があるという (Shön=2001)。

これらの研究の概要を簡単に紹介すると、フレーム分析とは、「実践者が自らの暗黙のフレームに気づくのをたすけ、それによって専門職の多元主義に内在するジレンマを経験するように導く。」ものである (Shön=2001:180)。レパトリーを築く研究は、「『行為の中の省察』に役立つ方法の事例を蓄積し、記述する機能を提供している。」とされ (Shön=2001:187)、法律や医学の分野などにおいて数多く実践されている。たとえば、裁判官が数ある解釈のなかからどのような推理のもとに目の前のケースと関連のある法律を決定するのか、といった問いのもとに行われる研究である。また、探究と理論の橋わたしをする基本的方法に関する研究は、「その理論が状況にあっていと確かに言えるように状況を再構成する」ことであり (Shön=2001:192)、4つの研究のなかで最も重要であるとされる。最後に、「行為の中の省察」の過程についての研究とは、行為者を観察することにより、その人の思考の過程を明らかにするものである。

専門職の思考に関する先行研究を概観すると、Shön が言うところの「レパトリーを築く研究」や「『行為の中の省察』の過程についての研究」に当たるものが広く行われていることがわかる。最も多いのは教師の思考過程を取り上げたものであり、次いで看護職の思考過程である。その他にも、医師や理学療法士などを対象とした研究が散見される。ここでは、教師と看護職の先行研究をいくつか見てみることにしたい。

教師の思考に関する先行研究には、①教師の実践的知識に関するもの、②教師の知識の領域と構造に関するもの、③教師の意思決定に関するもの、④教師の熟達に関するもの、⑤教師の反省的思考に関するもの、という5つの領域があるという (佐藤 1991)。例えば、佐藤らは、反省的思考に着目し、熟練教師の実践的思考様式の解明を目的とし、「教師が、授業の複雑な事実の何にどのように注目し、それらの事実の相互の関係をどのように解釈して、どのように問題の表象を行い、また、その問題をどのように解決しているか」を明らかにしている (佐藤ら 1990:180)。また、久我は教師の省察の過程に着目し、教師の省察的思考やそれに基づく行動の特徴を抽出し、教師に求められる専門性を明らかにしている (久我 2009)。

一方、看護職の思考に関する先行研究は、その内容から大きく二つに分けることができる。ひとつは、看護職がどのように判断しているかということに焦点を当て、認知過程の解明を目指すものである。いまひとつは、看護職が何を判断しているのかに焦点をあて、その認識内容から専門性を明確にするものである。たとえば、宮崎は6名の保健師にインタビューを行い、それらを質的に分析することによって、保健師の認識内容から看護の専門性に関わる判断について考察している (宮崎 1996)。また、山田らは、産業看護職13名を対象に、個別支援から何らかの事業化に至るまでの認識や判断についてのインタビューを行い、思考内容とその過程を明らかにしている (山田ら 2008)。

このように他の専門職においては、思考過程の実態を明らかにする研究や、思考内容からそれぞれの専門職の専門性を見出す研究が行われている。では、ソーシャルワークはどうであろうか。

1970年にバートレットが『社会福祉実践の共通基盤』において「ソーシャル・ワーカーが自分たちの実践に関してもっている思考の仕方 way of thinking」(Bartlett=1978: iv)について考察して以来、ソーシャルワーカーの思考に焦点を当てた研究はどの程度あっただろうか。残念なことに、我が国においては、そのような先行研究は決して多くはないのが現状である。

ソーシャルワーカーの思考に関する数少ない研究としては、ソーシャルワーカーの「意思決定」に焦点を当てたものをあげることができる。ソーシャルワーカーの意思決定については、価値葛藤、倫理的ジレンマの文脈で論じられ (Reamer 1999; Dolgoff 2005; Banks 2006)、意思決定モデルなども提示されている。我が国においては、鳥海によって葛藤を経験した様々な領域で働くソーシャルワーカーの意思決定過程が明らかにされている (鳥海 2009)。しかしながら、価値葛藤や倫理的ジレンマに遭遇した場面に限定せず、普段の実践におけるソーシャルワーカーの意思決定の内実についての研究はほとんど見当たらない。

「思考」ということばは用いていないものの、ソーシャルワーカーの意思決定に大きな影響を与える実践的知識に関する研究はいくつもある。実践的知識に関する研究とは、ソーシャルワーカーが実践を通してどのような知識を獲得しているかを明らかにするものである。それらの研究では、「経験知」、「実践知」、「援助観」などがキーワードとされ、様々な領域で働くソーシャルワーカーの実践的知識がいかに形成されているかが明らかにされている (横山 2008; 齋藤 2008, 2010, 2011; 小川 2012)。

また、先に述べた Shōn の専門家像を紹介し、ソーシャルワーカーが反省的実践家になることの重要性について指摘している研究もある (横山 2006; 大谷 2012)。さらに、反省的思考を身に着けるため、ソーシャルワーク教育に積極的にクリティカル・シンキングを取り入れることの重要性について言及しているものもある (平塚 2002; 原 2005; 北川 2009; 隅広 2010)。

以上の先行研究より、ソーシャルワークにおいて反省的思考が重要であり、そのような思考を教育していくことには重きが置かれていることがわかる。また、ソーシャルワーカーの経験知や実践知は、まさに「行為の中の知」である。その意味で、ソーシャルワークにおいても「行為の中の知」を言語化しようとする試みは積極的に行われていると言える。しかしながら、反省的実践家にとって不可欠な「行為の中の省察」の過程そのものについてはほとんど研究がなされていないのが現状である。

4. なぜソーシャルワーカーの思考に焦点を当てるのか

通常、ソーシャルワーカーは、クライアントと出会った後、クライアントに関する情報収集を行い、それらの情報を分析・統合することによってクライアントのおかれている状況を認識する。この部分はアセスメントと呼ばれ、ソーシャルワークの要であるとされる。

そもそも、アセスメントとは、診断概念に代わって Bartlett が初めて用いたことばである。専門的なアセスメントとは、「訓練を受けた精神の持主であれば誰によってもなし遂げられる論理的な分析の一形態である。それは、科学的方法を特質づける客観的で、厳格な思考を要求する。」とされる (Bartlett=1978: 174)。アセスメントの過程は「(1) 状況を分析し、そのなかで作用している主たる諸要因を確認する。(2) もっとも決定的であると思われる諸要因を確認し、それらの相互作用を明示し、そして取り扱うべき要因を選択する。(3) 起こりうる結果についての予想を基に、ソーシャル・ワーク活動に対して他にとるべき可能な活動を考慮する。(4) 採用すべき特定のアプローチと活動について決定する。」といった要素から成り立っている (Bartlett =1978: 157)。つまり、Bartlett はアセスメントをソーシャルワーカーの認識の過程として捉え

ているのである。

また、Siporin は、アセスメントとは「援助活動の基礎となる理解のためのプロセスと結果」であると定義している (Siporin 1975 : 219)。さらに、Hepworth らによれば、「アセスメントとは、情報を収集し、クライアント像やクライアントがおかれている状況を組織化するものである。アセスメントにはクライアントの困難さの特性や原因に関する我々の推論も含まれる。」という (Hepworth & Larsen 2002)。

このように、ソーシャルワークにおけるアセスメントは、状況認識の過程であり、その過程はソーシャルワーカーの推論によって為されるものであると捉えることができる。

アセスメントの重要な要素として取り上げられるもののひとつに「判断」がある。ソーシャルワーク実践においてソーシャルワーカーは、クライアントの置かれている状況の認識はもちろん、その状況における問題や課題の設定、その問題や課題を解決するための方法などについて様々な判断をくだしている。Johnson によれば、判断とは「実質的に意思決定をすること」であり (Johnson = 2004 : 358)、「事実、仮説、推測を明確にすることを伴った理由と証拠に基づいた決定」であるとされる (Johnson = 2004 : 358)。

このようなソーシャルワーカーによる判断はその実践を方向づける羅針盤のようなものであり、Bartlett も「専門的判断は、専門職と職業 occupation を区別していくもっとも重要な特色のひとつ」であり (Bartlett = 1978 : 152)、「知識および価値と、調整活動との間を橋渡しするものである。」 (Bartlett = 1978 : 174) としてその重要性を指摘している。言い換えれば、専門的判断によって専門職の実践が形づくられているということである。

また、ソーシャルワーカーはこのような判断を行うために、クライアントに関する情報と自身の知識や経験とを照らし合わせることにより仮説を導き出し、その仮説を確かめていく作業を行っている。Pamela のことばを借りれば、このように仮説を作り上げることは、「各々の仮説を確認したり、論駁したりしてエビデンスに照らし合わせてそれぞれの仮説を『テスト』すること」でもある (Trevithick = 2008 : 69-70)。つまり、アセスメントの過程とは、ソーシャルワーカーの頭の中で行われる思考の過程なのである。

しかしながら、ソーシャルワーカーは歴史的に「思考し認識すること」よりも「共感し実行すること」を重視してきた (Bartlett = 1978)。そのため、アセスメントについても、「ソーシャルワーカーが状況をどのように認識しているか」ということよりも、「何をアセスメントするか」、「アセスメントにおいて何を気をつけるべきか」などといった方法に強い関心を示してきたのではないだろうか。

Shön が指摘するようにそれぞれの専門職の専門性が実践者の「行為の中の知」にあるとすれば、アセスメントの方法に焦点を当て続けても、そこからソーシャルワークの専門性を見出すことはできない。したがって、ソーシャルワークの専門性を明確にするために必要なのは、ソーシャルワークの要であるとされるアセスメントの過程をソーシャルワーカーの思考、その中でもとりわけ判断や意思決定に焦点を当てて捉えなおすことではないだろうか。

5. ソーシャルワーカーの意思決定の質を向上するために

意思決定は、意識的に意思決定の問題として捉えなければ見過ごされてしまうものであることは前述したとおりである。そのため、アセスメントを「意思決定」という枠組みで捉えなおし、その内実を明らかにするということは、ソーシャルワーカーがクライアントの置かれている事象をどのように解釈したのか、というソーシャルワーカーの認識や判断の根拠を明らかにすること

でもあると考えられる。この部分は、ソーシャルワーカーの「行為の中の省察」の過程についての研究、または、「意思決定についての研究」でもあるといえ、これらを明らかにすることによって、ソーシャルワークの専門性を見出すことができると考えられる。エビデンスに基づく実践の必要性が声高に叫ばれ、実践の質を担保することが求められている今日だからこそ、実践の根拠としてソーシャルワーカーの意思決定過程の内実を明らかにすることは必要不可欠である。ソーシャルワーカーの意思決定過程の中身を言語化することは容易なことではないが、それは、専門職としてのアカウンタビリティを果たすことにもなり、専門職であるソーシャルワーカーには避けられないものである。

では、ソーシャルワーカーの意思決定過程の内実が明らかになれば、それで良いのであろうか。前述したように、人間は常に正しく推論することができるわけではない。そのため、ソーシャルワーカーの意思決定過程の実態が明らかになったとしても、そこに存在する認識や判断が常に正しいものであるとは限らない。Gittermanによれば、ソーシャルワーカーは実践の中で様々な決定を行っており、そこで行われる推理は、「個人的価値や偏見にではなく訓練された帰納のおよび演繹の推理に基づいたものでなければならない。」という (Gitterman=1999)。また、Gibbs とも「科学的知識や科学的推論は専門的な意思決定の質を高める」と指摘している (Gibbs & Gambrill 1996)。そのため、ソーシャルワーカーの意思決定の質を向上させるには、ソーシャルワーカーが自分自身で科学的な推論ができるよう訓練をしなければならない。そこで大きな役割を果たすのが「クリティカル・シンキング」である。クリティカル・シンキングとは、「一種の評価に関する思考である。それは、批評と創造的思考の両方を含み、特に信念または行動を裏づけるために示される推論や議論の質に関わる。」と定義される (Fisher=2005:18)。専門職としてのアカウンタビリティを果たすためにも、ソーシャルワーク実践や教育に積極的にクリティカル・シンキングを取り入れていくことが必要であると考えられる。

おわりに

前述したように、ソーシャルワーカーはこれまで「思考し認識すること」よりも「共感し実行すること」に価値を置いてきた。そのため、ソーシャルワーカーは実践においてたくさんのクライアントに出会い、その過程で様々な知恵を得ているにもかかわらず、それらの実践の知恵を十分に言語化することなく、実践のなかに埋もれさせたままにしているのではないかと考えられる。しかし、「反省的实践家」の視点に立つならば、現状ではソーシャルワーカーを専門家と呼ぶことはできないのではないだろうか。ソーシャルワークの専門性を明確化し、専門職としてのアカウンタビリティを果たすためにも、ソーシャルワーカーは「反省的实践家」となり、「行為の中の知」を「行為の中の省察」を通して言語化していくことが求められるのである。

しかし、Shön が指摘するような専門職の反省的思考についての研究は、決して研究者ひとりで達成できるものではなく、「実践者と研究者、研究者と実践者のパートナーシップ」が必要とされる (Shön=2001:187)。

したがって、まずはソーシャルワーカーにとって反省的思考がいかに重要かを伝え、その重要性に一人でも多くの実践者に気づいてもらうことが求められる。また、一方で、現場に出た際に「行為の中の省察」ができるよう、学生のうちから反省的思考を身に着けておくことが必要となるのではないだろうか。今後は、そのための具体的な研究と教育を行い、ソーシャルワークの専門性の可視化を図っていきたい。

文献

- ・秋山薊二 (2012) 「第7章 エビデンス情報に基づくソーシャルワークの実践に向けて」『教育研究とエビデンス—国際的動向と日本の現状と課題』 明石書店, 205-230.
- ・Alec Fisher (2001) *Critical Thinking: An Introduction*, Cambridge University Press. (=2005, 岩崎豪人・品川哲彦・浜岡剛・ほか訳 『クリティカル・シンキング入門』 ナカニシヤ出版.)
- ・Bartlett, Harriet M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, NASW Press. (=1978, 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』 ミネルヴァ書房.)
- ・Frederic G.Reamer (1999) *Social Work Values and Ethics*, Columbia University Press. (=2001, 秋山智久監訳『ソーシャルワークの価値と倫理』 中央法規.)
- ・原久美子 (2005) 「ソーシャルワーク教育における批判的思考の可能性」『人間の福祉』 17, 163-175.
- ・Hepworth, D.H., Rooney, R.H. & Larsen, J.A. (2002) *Direct Social Work Practice Theory and Skills*, Brooks/Cole
- ・平塚良子 (2002) 「ソーシャルワーク・マインドを育成する実習教育を目指して」『社会福祉研究』 84, 84-89.
- ・藤井美和 (2004) 「ヒューマンサービス領域におけるソーシャルワーク研究法」『ソーシャルワーク研究』 29 (4), 28-35.
- ・福原裕子 (2006) 「介護過程の展開における思考プロセスに関する研究」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』 51, 37-43.
- ・市川伸一 (1997) 『考えることの科学—推論の認知心理学への招待』 中公新書.
- ・石村善助 (1969) 『現代のプロフェッション』 至誠堂.
- ・川崎昭博 (2010) 「生活支援としてのケアワークとその思考過程について—介護過程についての一考察」 474, 323-339.
- ・北川清一 (2009) 「ソーシャルワーク研究における批判的分析の方法—児童養護施設実践を素材にして」『ソーシャルワーク研究』 35 (2), 50-56.
- ・小橋康章 (1988) 『決定を支援する』 東京大学出版会.
- ・久我直人 (2008) 「教師の専門性における『反省的实践家モデル』論に関する考察(2)—教師の授業に関する思考過程の分析と教師教育のあり方に関する検討」『鳴門教育大学研究紀要』 23, 87-100.
- ・Max Siporin (1975) *Introduction to Social Work Practice*, Macmillan.
- ・宮崎美砂子 (1996) 「公衆衛生看護の援助過程における判断に関する研究」『千葉看護学会誌』 2 (1), 45-52.
- ・小川幸裕 (2012) 「自律性の確保を契機としたソーシャルワーク課題の再形成と実践観形成プロセスの検討—独立型社会福祉士の実践から」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』 12, 1-10.
- ・大谷京子 (2012) 『ソーシャルワーク関係—ソーシャルワーカーと精神障害当事者』 相川書房.
- ・齋藤征人 (2008) 「精神保健福祉実践者の『実践知』形成過程に関する実証研究」『帯広大谷短期大学紀要』 45, 1-10.
- ・齋藤征人 (2010) 「社会福祉士の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」『帯広大谷短期大学紀要』 47, 31-44.
- ・齋藤征人 (2011) 「高齢者福祉実践者の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」『帯広大谷短期大学紀要』 48, 55-68.
- ・Sarah Banks (2006) *Ethics and Values in Social Work*, Macmillan.
- ・佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1991) 「教師の実践的思考に関する研究(1)—熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に」『東京大学教育学部紀要』 30, 177-198.
- ・佐藤学・秋田喜代美・岩川直樹・吉村敏之 (1991) 「教師の実践思考様式に関する研究(2)—思考過程の質的検討を中心に」『東京大学教育学部紀要』 31, 183-200.

- ・ Shôn, Donald A (1983) *The Reflective Practitioner*, Basic Books. (=2001, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える』 ゆみる出版.)
- ・ 嶋田啓一郎 (1980) 『社会福祉体系論』 ミネルヴァ書房.
- ・ 隅広静子 (2010) 「クリティカル・ソーシャルワークにおける『クリティカル』概念の整理の試み」『福井県立大学論集』 34, 43-55.
- ・ 梅枝愛郎 (2010) 「診断と論理—仮説演繹法」『北関東医学』 60 (4), 375-381.
- ・ Pamela Trevithick (2005) *SOCIAL WORK SKILLS: a practice handbook*, Open University Press. (=2008, 杉本敏夫訳 『ソーシャルワークスキル—社会福祉実践の知識と技術』 みらい.)
- ・ 山田淳子・佐藤由美 (2008) 「個別支援から事業化提案決定に至るまでの産業看護職の思考過程」14 (1), 8-16.
- ・ 山島重 (2002) 『わかるとはどういうことか—認識の脳科学』 ちくま新書.
- ・ 横山登志子 (2006) 「地域生活支援をめぐる精神科ソーシャルワーカーの本質的使命—2つのジレンマを手がかりとして」『社会福祉学』 46 (3), 109-121.
- ・ 横山登志子 (2008) 『ソーシャルワーク感覚』 弘文堂.